ＪＴＱ

あんにん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＪＴＱ

【Ｎコード】
Ｎ６５１２Ｅ

【作者名】
あんにん

【あらすじ】
この世には“金”さえだせばどんな願いでも叶えてくれる女がいる。女の名はキネ。元・殺し屋――――初めての小説なのでいろいろおかしいところあると思いますが読んでくれるとうれしいです。

Req:1 Part.A

この世には“金”さえ出せばどんな願いでも叶えてくれる女がいる。
女はとある街の雑居ビルの二階に住んでいる。女の名前はキネ。
元・殺し屋――――

Req:1 Part.A

人を殺したいと思ったことはないでしょうか。
友達がちょっと悪ふざけしたんで軽はずみに思うそんなものではなく、例えば、そう、愛していた人に裏切られて、さも道具同然のように捨てられたときに思うようなあの気持ち・・・!!!
私、岸本彩(きしもとあや)はとある人に依頼をしにこの都会へ来ました。
駅から徒歩十分の雑居ビルにその人がいると聞いて――

「ん、なんだ、依頼か」
「あ、はい・・」
入るとそこにはソファーでくつろいでいる女の人がみえました。
女の人は私が依頼主だとわかると立ち上がりソファーに座るようにいます。
私がそそくさとソファーに腰掛けると女の人は冷蔵庫から出した麦茶を湯飲みに注いで私に差し出し、相手側のソファーに座り問いかけます。
「で、どんな依頼だ?」

「えと、その・・・」
このようなことを依頼してもいいのかどうかわかりませんが、ためらうことなく私は依頼の内容を話します・・・・・・

「人を、殺したい？」
「はい・・・！！」
当然と言えば当然なのでしょうが私が人を殺したいと言うと女の人はそれきり黙ってしまいました。
そこで私は事前に調べて用意してきたものを膝元に置き、いいます。
「お金もここに用意してきました。だからどうか私の依頼を引き受けていただけないでしょうか？」
「・・・・・・・・・・・・・・。」
女の人は、私の膝元に置かれたもの・・・・お札の束を見て深く考え込みます。
「・・・・いくらだ？」
女の人は私の膝元にあるお金の額を尋ねました。私はすぐに
「７００万円はあります。」
即答します。するとまた女の人は「う～ん・・」と考え込みます。
しばらく経った後、胸ポケットに入れていた煙草を口にして、ライターで火をつけながらいいます。
「・・・・わかった。依頼を、引き受けるよ」

交渉、成立です。

ここで、女の人について少し触れたいと思います（いつまでも女

の人では作者も打つのがめんどくさいので）。
女の人の名はキネ。今、インターネット等で騒がれている「どんな願いでも叶えてくれる女」だそうです。
背は割と高いほうで１６５ｃｍはありそうです。
髪はミドルヘアでさっぱりした感じです。歳は・・・２０代前半でしょうか？もう少し若いかもしれません。
そんなキネさんの願いを叶える条件はたった一つ。簡単・単純・明確です。
お金です。キネさんは多額のお金を受け取ることを条件に依頼を引き受けてくれるそうです（なので今回、あらかじめ口座から多額の現金を下ろしてきました）。
請求金額は、数百万から数億、数十億とかなり高額だそうです（正直、依頼を引き受けてくれるか不安でした）。
今私が知っているのは、こんなところです。

「・・・ひとつ、聞いてもいいか？」
「はい。なんでしょうか」
お金を受け取ったキネさんが訊ねます。
「なんで、人を殺したいって思った？」
「それは・・・・」
私は隠す必要もないと思いキネさんにその理由を話します。

私には、最愛の彼氏がいました。その彼とは5年付き合っていました。
出会い系で知り合った仲ですが、とても楽しくやっていました。
遊びのことでも、勉強のことでも、・・・Ｈのことでも。
私はある日、彼の部屋に忘れ物をしていたことに気づきました。

彼に何度か電話しましたが返事はありませんでした。
たまたま今日は彼が仕事の休みの日だったので部屋に行って忘れ物ついでに驚かせてやろうと思い彼の住んでるアパートに行きました。
アパートに着いたはいいもののドアノブには鍵がかかってました。
私は多分コンビニにでも行っているんだろうなあ、と思い、持っていた合鍵で彼の部屋に入りました。そこで信じられない光景を目の当たりにしました。
彼が。寝室で。他の女の人と。Hしていたんです。
私は唖然としていましたが彼が私の存在に気づき、驚いた様子でいいます。
「彩、お前、なんでここに・・・!?」
「な、なんで、その女の人、誰よ・・・!!」
私が繰り返しそういうと彼は頭をぼりぼりと掻きながら私の元にやってきてこう言い放ちました。
「悪い、彩。実は、俺、好きな娘ができた。だから、別れてくれない?」
「・・・・・・・!!!」
突然でした。彼に別れを告げられて、私はただ呆然とするしかありませんでした。
「実は、前々からお前に別れようって言おうと思ったんだけどさ、なかなか切り出せなくって。でもお前が来たんでかえってよかった。」
「・・・・・・・・・・・・・」
「じゃあな。」
「・・・・・・・・・なんでよ」
「え?」
「なんでよ!なんでよ!!!なんでよ!!!なんで他の女と・・・!!」
涙をこらえながら私は彼に問い詰めます。すると、彼は言いました。

「・・・お前より、あの娘のほうが、Hがうまいからだよ」
「・・・え？」
「いや、俺今までに複数の女の子（彩含む）と同時に付き合っていたけどよ、その娘ら全員とHしてさ、いまの彼女が一番Hうまいってわかったんだよね。」
「・・・・・！！！」
信じられなかったです。彼はただ単にHの上手い下手で彼女を決めていたんです。
私は彼の部屋にいるのが不快になってすぐに靴を履いてその場から逃げ出しました。

「・・・・・・・」
「それからしばらくです。私は何もやる気がなくなり、仕事も辞めて、毎日ただ時が過ぎるのを待つだけでした。ある時、例の別れた日のことを思い出しました。彼にフラれ、あんなことまで言われて・・・・急に彼に対する殺意が沸きました。それから数日、彼のことを殺そうと決心し、彼のアパートへ行きましたが、私の殺意を悟ったかのように彼はアパートから姿を消していました。」
「・・・なるほど、ようはその彼が引っ越してどこにいったかわからなくなったんで私を使って彼の居場所を探ろうと、そういうことだな？」
「そうなんです。大家さんに聞いても彼は行き先を言わずに出て行ったと言ってましたから・・」
キネさんは、しばらく考えた後に、携帯を取り出して電話を始めました。何を言っているかは聞き取れませんでしたがなにかを頼んでいるようでした。
数分後、キネさんが電話を終えて言いました。
「よし、3日後、またここへ来てくれ。その日がお前の・・決行日だ」

「あ、えと・・、はい。分かりました」

私はそこでキネさんといったん別れ、３日後のために準備をすることにしました・・・・

Ｒｅｑ：１　Ｐａｒｔ．Ｂ

あれから３日か経ちました――――

Ｒｅｑ：１　Ｐａｒｔ．Ｂ

私はキネさんからの連絡を聞いた後、身支度を整えキネさんの住む雑居ビルへ来ました。
それから、彼女に連れられて徒歩５分程度の自動車工場跡へ足を運びました。
工場内はまだ夕方になり始めた頃だというのに、薄暗く、少し怖いです。
工場内を歩きながら
「依頼どおり、お前の言っていた彼はちゃんと連れてきた」
キネさんが煙草を吹かしてそう言いました。
「ありがとうございます」
私は深々と頭を下げて感謝の言葉を言います。今の私ができる最大限のお礼はこれしかないから。
「あとは・・・、自分でどうにかしな。ここからはあんたがやることだ。私はあんたが殺すかどうか見物はするが介入はしない。」
「はい、わかっています。」
その後キネさんは工場内の奥の方へ行き、大きなガラ袋を片手で引きずりながらやってきました。
「この中にお前の探していた彼がいる。今は薬で眠っているが、すぐに起こしてやる」
そういってキネさんはガラ袋からガラクタを扱うかのようにばさばさと中身を出します。

そこから――――見間違えることのない、彼の姿が見えました。
「ほら、起きな。」
キネさんは彼を袋から取り出すと、お腹を蹴って彼を起こします。
彼は咳き込んだあとに辺りを見回します。
「ゲホッ、ゲホッ・・ん・・？ここは・・どこ、だ・・？」
寝起きだからなのか彼はまだ少しボーっとした顔立ちでした。
ですが、いつもと違う場所、しかも、振った彼女の姿が目の前にあれば、目を覚ますのが普通でしょう。
「あ、彩・・・！！お前、なんで・・しかも、ここはどこだ！？」
彼は見慣れぬ光景を前にただただ驚いていました。
「お久しぶり。」
「お前、ここはどこだ！俺はなぜここにいる！！説明しろ！！！」
彼がパニック状態で私の両肩をつかみ、問いただします。私は何も答えません。
それから、辺りをもう一度見回す彼は、キネさんの姿を見て歩み寄ります。
「テメェ・・！そうだ思い出した。テメェは昨日、俺の部屋にやってきた女じゃねえか！！おい、どこだここは！！なぜ俺はここに・・・・！！！」

パァン・・・・

「うるせえ・・・！！黙れ糞野郎」
キネさんは懐から拳銃を取り出し彼の足元近くに撃ちました。
彼はそれきり黙ってしまい、床にしりもちをついてしまいました。
私は、それから用意した包丁を、持参した旅行バッグから取り出しました。

すると彼は、途端に言葉を発します。
「おい、なんだよ、それ・・・！！」
彼は体を震えさせながら訊ねます。私はすぐに彼に言葉を返します。
「これ？これはね――――」
私は包丁を振り上げて言います。
「あなたを殺すための道具」

ズダンッ！！！

私は勢いよく包丁を振り下ろします。彼の左腕が飛んでいきます。
「ぎゃアアアアあああああああああああああああああっ！！！！！！！！」
彼が悲鳴をあげます。赤ん坊が大声で泣き叫ぶかのように。
「でも、すぐには殺さない。あなたには激痛に苦しめられながら、死んでもらうわ！！！！！」
私が痛みで耐え切れなくなって倒れこんだ彼の上に馬乗りすると、キネさんが訊ねます。
「それは・・ブッチャーナイフか？」
「あ、キネさんわかります？そうです、ブッチャーナイフです。私の祖父が精肉業者を経営しているので、こっそり拝借してきたんです」
キネさんはそれだけ聞くと煙草を吹かしてまた黙ってしまいます。
私はそれにはかまわずに彼を見下します。彼は痛みにこらえるので精一杯でした。
「痛い？痛いでしょ？ねえ！！！」
そういってブッチャーナイフを床におき、私は彼のお腹に万能包丁を突き刺します。

「ぐあああああああああああああああああああっ！！！！」
ゆっくりと、ゆっくりと、時々すりこぎの要領でこねくり回しながら突き刺し進めていきます。
最後にグッと力をこめて押し込むと彼がまた悲鳴をあげます。
1本突き刺しもう1本、もう1本と万能包丁を突き刺します。
2～3本目あたりから彼が吐血をし始めました。吐血しながらも彼はずっと悲鳴をあげていました。

それからしばらく、彼は悲鳴どころか声すら出せないような感じでした。
ただただ咳き込み吐血を繰り返すだけ、今にも死にそうな状態でした。
それでも彼は時々「死にたくない・・」とつぶやいていました。
「死にたく・・・・ない・・・・・」
彼はまたつぶやきます。叶わぬ夢を。変わらぬ現実を。みじめにつぶやきます。
涙を、涙を流しながらつぶやきます。
右手、両脚、男性性器を切断した上にお腹には数本の万能包丁。にもかかわらず、まだ彼はつぶやきます。
私は、仕上げに掛かるため、ブッチャーナイフを手に取り、振り下ろす体制にはいります。
「私、本当にあなたが大好きだった。一緒に遊んで、一緒に笑って、一緒にHして・・・本当に有意義な時間を過ごせた。私、あなたとだったら結婚してもいいって本気で考えていたんだよ・・？」
私は流れ出る涙をこらえながら、彼にいいました――――

「さようなら」

私は彼の頭にめがけブッチャーナイフを振り下ろしました。

彼の頭は真っ二つになりました。
彼は、彼は死にました。その瞬間、
涙が、涙が止まりませんでした。
声を、声を抑えられませんでした。
なぜかはわかりませんでしたが、
私は、大声をあげて、泣きました。
キネさんの姿は、その時、もうどこにもありませんでした。

その後、私は警察によって逮捕されました。
誰からか通報があって来たのだそうです。

キネさんでしょうか。誰なんでしょうか。
わかりません。ですが、私にはどうでもいいことです。
私は、やりたいことをやった。
それだけですから。

～Ｒｅｑ：１　Ｆｉｎ．～

Ｒｅｑ：１　Ｐａｒｔ．Ｂ（後書き）

ブッチャーナイフ
精肉業者が用いるナイフで、性質的には「叩き切る」という側面において鉈（なた）や斧に近く、汎用の刃物ではない。食用の獣肉を切り分けるという目的に特化した独特の構造・形状を持ち一般では利用されないナイフである。

Ｒｅｑ：２

あれから２日後――――
私、キネはこの間の依頼で受け取った依頼料７００万円を銀行の口座に預け入れるところだった。
場所は雑居ビルから徒歩１０分の小さい銀行。
そこで金を預け入れたらすぐに帰る予定、だったんだが・・・
あいつと喋ってなければあんなコトに巻き込まれずにすぐ帰れたかもな。
まあ、その後で６００万ほど振り込んでもらったから文句は言えないんだろうが・・

Ｒｅｑ：２

やはりあれだな、うん。
毎回毎回思うが、周りの視線がうざったい。
私が金を預け入れるのがそんなに珍しいのか？
私はそう思いつつ依頼金を預け入れていく。

「今回ので総額６億７５００万か・・」
自分の通帳を見てそう呟く。
さて、帰ろうかな。と思ったそのとき、私は久しぶりにそいつに会う。
「やあ、支店長。お元気で？」
「お、キネさんじゃあありませんか。お久しぶりですね」
今、私と会話しているこいつはこの銀行の支店長、名前は・・思いだせん。忘れた。

私の仲間で殺し屋を脱退後、この銀行の支店長になった。
「いつもありがとうございますねえ～、キネさん」
「上機嫌だな・・、あ、そうか、私が預け入れるとその分おまえらの側も利益が増えるんだっけか？」
「ちょっとキネさん、あまりそういう発言は慎んでください・・（事実ですが）」
なあんて会話をやりとりした後、私は銀行を出ようとした。
その時。

変なマスクを付けた2～3人くらいの野郎が現れ、
「ここにある金を全てよこせ」
と同時に、拳銃を窓口の女に付き付けた。
「・・・・・・・・・・・・！！！！！」
窓口の女は声にならない悲鳴をあげる。
そして、周りの客どもは騒ぎ出す。
「うるせぇぇよ！！！」
一人の男が銃を発砲する。一瞬で周りは静寂となる。
私は「なんだ、銀行強盗か」と気にもせずに帰ろうとする。
「キネさんキネさん」
野郎に聞こえない程度の声で支店長は私を呼び止める。
「なんだ？」
「なんだ？じゃないですよ、このままだと奴らに金を持っていかれます。助けてください」
支店長はあわてた様子でいう。それに対して私は即座に答えてやる。
「嫌だね」
「な・・！」
「めんどうくさい。警察でも通報してそいつらに助けを求めろよ。あれだ。窓口の机の裏、だっけか？にそういうのあるだろ。それでも私に頼みを乞うということはイコール依頼を引き受けてくれとい

うことだ。そして、私に依頼を引き受けて欲しい時の条件は・・わかってるよな？」
「警察は、役にたたない・・」
支店長はしばらく黙る。その間に野郎は窓口の女に手渡されたバッグを持ってずらかるところだ。
支店長はそれを見てあわてたのか
「わかった。金は、出す。だから、金を、取り戻してほしい・・」
しぶしぶだが金を払うことを了承した。
「よし、なら、契約成立だ。」
本当はもう帰りたかったのだが、仕方ない。
私は後ろを向き、野郎のところへ歩み寄る。
「後で金、口座に振り込んでおけよ」
支店長は小さくうなずいた。

・・・・・・。

野郎の前に立つと、当然だが
「何だテメーは？どけ」
と言われた。
「私か？お前らに金を取り戻すよう言われたんだ。」
続けて言う。
「だから、その金を置いて、さっさと消えな」
すると男は私に拳銃を向け、言い放つ。
「うるせーな、テメー。殺すぞ？」
私はすかさず携帯用拳銃を取り出し、野郎の頬擦れ擦れを狙って撃った。
仮面の頬の部分が削り取られ、そこから血がつー、と垂れる。
「！！？」

野郎の一人は何が起きたかわからず数歩後ずさりした。
だが、もう一人の野郎が近くにいた女性を引き連れ、言った。
「おい、女。あまり調子に乗るな。今すぐそこをどけ。さもなくばこの女を殺すぞ。」
「！！」
野郎は連れてきた女性に銃を突きつけている。
女性はすぐにでも泣き出しそうな顔をしていた。
どうやら、人質らしい。
馬鹿な野郎どもだ・・・
私は構わず拳銃を野郎に向ける。
「！！」
野郎、人質の女性、周りの人から「は？」とでもいいたげな感じが伝わる。
「テメー。目が見えてねえのか？耳が聞こえてねえのか？そこをどかねえとこの女を殺すぞっつってんだよ！」
「構わないよ、殺したければ殺せばいいだろ。その女は私には関係ないし、私は金さえ取り戻せさえすればいいからな」
今ので野郎のなにかが切れたようだ。
「舐めやがって・・！！！死にやがれぇぇぇぇぇぇ！！！」
野郎が銃を私に向けた。
私は野郎共の左肩を拳銃でぶっ放してやった。
「ぐおお・・」
野郎共は肩を手で被い床にうずくまる。
その間に女性を離れた場所へ促し金を手にした。
「テメェ・・」
野郎の一人が私の足を掴もうとする。

パァン！！

「ぐあああああ・・・」
ムカついたので手を撃ち抜いてやった。
そして支店長に金を渡し、帰り際に野郎どもに言ってやった。
「人質なんて、私には通用しない。背丈があの女性と１０センチ以上違うお前らなんか簡単に拳銃(こいつ)で撃ち抜けるさ。」
私はそう言って、その場を後にした。

後で支店長に電話して聞いたことによると、警察が来たのはそれから5分後だったらしい。
ホント、使えねー奴らだ・・。
「それで、ちゃんと振り込んでくれたか？」
「はい、大丈夫ですよ。きちんと振り込んでおきました。後日、ご確認ください」
それを聞いて電話を切ろうとするところで支店長に聞いた。
「支店長、変わったよな・・」
「・・・・・・・」
「昔は“組織”の中でも結構なレベルの腕前だったのにな・・」
「・・・・・・・」
支店長は黙ったままだ。
「お前なら、あんな奴ら、いともたやすくなぎ倒せたはずだ」
「・・・変わらなければ」
「？」
「変わらなければ、ならない。普通の人間のように。暮らすためにはな、変わらなければならない。妻と子供と、楽しく円満に過ごすには、変わらなければならない。もう、殺し屋ではないからな・・」
「・・・・・・・」
今度は私が黙りこんでしまう。

そう考えると、私は変わったのか？変わっていないのか？
分からない。
「じゃあな・・・」
ピ。と電話を切り、窓から移る自分を見つめる。
「なあ、お前。私は変わったか？変わって、いるか・・？」
「私は、もう、殺し屋じゃあ、ないよな・・・」
窓に映る自分にそうつぶやいた。

Ｒｅｑ：２（後書き）

楽しみにしていた方がいましたら、遅れてしまい申し訳ございません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6512e/

ＪＴＱ

2010年10月15日23時39分発行